

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
な か ま 編 集 委 員 会
〒285-0025
佐倉市鐺木町 198-3
電話 (043)485-1801

多言語学習の楽しさ-----
ヘソ山とケツ山-----

林 和 義
宮 本 定 雄

挨拶はいろはの「い」-----
感じるままに 思いつくままに--

廣 吉 正 毅
柴 田 伸 一

と かわ 外 川 漁 港

横山 詔正

歴博の自主学習講座「旅と街道」で江戸期の銚子を調べた事になりました。何人かで手分けし、私は外川漁港の担当です。

外川漁港は犬吠埼の南に位置し、銚子電鉄の終点にあります。低い台地が太平洋に落ち込む地形に人家が密集しています。ここに「外川ミニ郷土資料館」があります。館長さんは七十を越えた女性で、外川の事は何でも知っています。そしてまちへの愛情がほとばしる語りは魅力的です。

今その面影はありませんが、外川は江戸時代の最盛期には鰯漁で繁栄し「外川千軒大繁盛」と呼ばれた湊だったそうです。この基礎を築いたのが紀州の崎山治郎右衛門で、万治元年（1658）紀州の漁法（八手網）を伝えて

から以後六年余りを費やして湊を開き、碁盤目状の町割を行ったのだといえます。利根川の川口は難所で遭難が多く、安全な湊を求めての事でした。湊は大正時代に全面改装されるまで使われており、その技術の高さが偲ばれます。

のは、干鰯（鰯を天日干しにする）や粕（鰯を煮て魚油を取り除いた）です。鰯の需要はうなぎ登りで関西、九州の漁場で鰯を取り尽した後、鰯を求めて房総へ旅網（季節的な出稼ぎ）が始まり、やがて房総への定住へと変化したのです。

房総と紀州には同じ方言が沢山あります。例えば、薬指はベニサシビ。殴るはクラワスやドズク。蝉はセビ、洗濯はセンダクと濁ります。首はソツクビ。数え上げれば切りがありません。又、同じ地名も勝浦、白浜、江見、網代、和田等と多数有ります。

銚子は本州の最東端にありますが、最南端にある紀伊半島は、その殆どが山地と際限を知らぬ黒潮の海。多くの造船技術、漁労技術を房総に伝え、又房総に定住した人も多く縁の深いところです。是非近いうちに訪れてみたいと思っています。

（編集委員）

多言語学習の楽しさ

これまで英語、スペイン語、フランス語、中国語を学び、何とかそれらを活かして仕事をしてきた。退職後は国際交流の手伝いや語学ブログ作りで情報発信をしながら、毎朝、インターネットで海外のニュースを読むことも日課となった。

言語学習は自分の世界を広げると言われるが、それは言語圏によるもの見方、考え方の違いを知ることが出来るからである。

去年話題になった「黒マグロ」一つにしても英語では「青マグロ」、フランス・スペイン語では「赤マグロ」、中国語では「金槍魚」と色が変わってしまう。世界にはこのマグロを日本人のように黒いと見ていない人々も沢山いるのである。海に住む軟体動物「タコ」、日本では「8本足」だが、これを「足」と見

ているところと「手足」「触手」と見ているところと言語によって様々である。因みに、中国語では「腕足」、英語では「腕」、スペイン・フランス語では「触手」となる。こういう違いは数えきれない。

国際問題を見る目も言語圏で異なることが多い。そういう異なるものの見方に目を向け、耳を傾ける。これは国際社会のみならず日常生活でも大切な事である。自分以外の意見に同意できなくても、色んな見方が存在するという事実を認めることから受容性と寛容性が生まれる。

言い換えれば、人の話を傾聴し、多言語でニュースを読み、違いの存在を受け入れる。するとそこに理解が生まれ、自分の考え、見方が確立し、相手との違いを認め合いながら生きて行けるようになる。語学はそんなことも教えてくれる。

(染井野 林 和義)

挨拶は

いろはの「い」

近ごろ人情は薄らぎ、人と人の絆は緩んできたとよく言われる。

明治の末、夏目漱石が『草枕』のなかで、「兎角とがくに人の世は住みにくい」と書いたように、この世の中は昔から矛盾にあふれ、争いごとは絶えないものであったようだ。

それではわたしら小市民は、どうすることが大切だろう、となる。

今はやりのグローバルゼーション^①世界規模で物を言ったところでラチは明かない。そこで身近なわたしらの生活圏内のことで、一つだけ提案したい。

それは、家族はもちろん町内の人と顔を合わせるとき、または顔を合わせたとき、まずは挨拶を交わすことである。人は何かするときは、挨拶をしてから話に入り行動する。気軽に一声、大きな声で安否

を確認するだけでいい。

少なくとも相手が尊敬できる人であろうとなかろうと、気に入らない人であろうとなかろうと、自分からきちっとお辞儀をして挨拶をする。間違っても自分からえらそうに、顎を上げたりして応対してはならない。この一声が次の話題がスムーズにいく端緒になる。

人はひとりで生活することは難しい。胸襟を開き合えば絆も生まれ助け合いの気持ちも湧いてくる。まず挨拶することに始まって、次に会話してわだかまりが無くなり、矛盾が消えて人々は幸せに生きていく。

挨拶は人間関係がうまくいくいろはの「い」である。人類愛への文化である。(ユーカリが丘 廣吉正毅)



へソ山とケツ山

おらが故郷信州・安曇野の西の山に、鍬ノ峰（一六二三^{ハル}）と言う山がある。三千万年前、幾度となく火山活動が繰り返され、目の前にある大久保山と同じ位の高さになった。でも向いの女性が寝ている姿に見える東山が、気になつて仕方がなかった。

鍬ノ峰は、その鷹狩山（へソ山）と南鷹狩山（ケツ山）をなんとか見たいと、首を伸ばしたり爪先立ちしたが、前に立ちはだかる大久保山が邪魔をして、見させてくれない。ある日、鍬ノ峰は大久保山に向つて、「おい大久保の爺さん、あのへソ山の下はどうなつちよるかいのう？」と聞いてみた。大久保山は爺さんと言われ腹が立つたが、相手が若造で背が低いから馬鹿にして、笑つて言うことを聞かない。そして「鍬さんよ、東山の彼女を見たけりや俺様

より大きくなれよ。俺は毎日見ているがなかなか良い眺めだぞ」と言つて、鍬ノ峰をからかった。

その後、鍬ノ峰は少年期から青年期に入つて、なんとしても東山の彼女の顔を見たいと思つて、種々やつて見たが大久保山より高くない。

しかし、突然西山は火山活動が活発になり、東山のへソ山の方からも大久保山の後ろに、若い鍬ノ峰の姿がちらほら見え、そして、その若衆がなかなかの美青年に見えた。

ある日、鍬ノ峰とへソ山は大久保山の頭を引つ込めさせる相談が纏まつた。そして、西山と東山の断層を同時に揺すつて、爺さんの頭を崩すことに、遂に成功した。

あれ程見たいと思つていたへソ山の下は、なんのへんてつもない種も仕掛けもなかった。少々がっかりした。

（千成 宮本定雄）

感じるままに、

思いつくままに(三)

2010年5月25日

昨夜遅く次男のいる広島から帰ってきました。十ヶ月に

なる孫と遊んできました。

帰りの新幹線の時刻まで時間がありませんでした。定期観光バスで広島市内を見学しました。この歳になるまで平和記念公園や原爆ドーム、そして平和記念資料館を訪れていませんでした。平和記念資料館では、原爆の光の中に消えていつてしまった人の影だけを残している石、8時15分を指したままの主のいない腕時計など、多くの遺品を見ていると深い悲しみと、やりきれない怒りがこみ上げてきました。

新緑や人無き影を映す石

広島忌八点一五指す時計

2010年5月26日

曇り空で肌寒い一日でしたね。夕方から東京でのクラス

会に出かけ楽しい時間を過ごしました。しかし帰りは少し酔いが回っていたことと、最近或る友人に対し自分の都合を押し付けるだけで、その友人の気持ちに誠実に添えなかったのではと考え始め、電車を乗り過ぎしてしまいました。

恩師から卒業間際に、社会に出て、一番大切なことは常に誠実さを貫くことであるという言葉頂きました。人生の局面、局面で誠実さを貫くことは自分の心を傷つけ、他の人の心を傷つけるかもしれないし、仕事もうまくいかないかもしれないと言われたことが、私の心の奥にあります。自分の生き様を振り返つてみてどれ程誠実であったかを考えてみますと、恥ずかしい限りです。このようなことを考えて電車を乗り過ぎしてしまつたわけです。疲れた夜になりました。おやすみなさい。

（稲荷台 柴田伸一）

9月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等の修正をさせていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL 043 - 485 - 1801

〒285 - 0025 佐倉市錦木町198 - 3

さくら道

2011年7月18日歴史は動いた。W杯なでしこJAPAN金。日本女子サッカー胎動から30年、アトラクタの屈辱から15年、ついに世界の頂点にたつたのだ。この快進撃は、澤穂希ほまれのハットトリックから始まり、どいつも、こいつも凄いドイツを、丸山が華麗なるシュートで一蹴。鉄人スワクデンは川澄が相手DFに押しつぶされながらも空中で足がねじ込む。鉄

あとがき

「佐倉新町江戸勝り」の語源について、堀田加賀守正盛が商人から運上、冥加などという税をとらなかつた善政が江戸に勝つたことに由る、と本紙7月号で紹介されていたが、もうひとつ腑に落ちないままでした。

最近佐原を訪れ、地元ボラティアガイドから佐原の郷土史について説明を受けたとき、目から鱗が落ちた。

「江戸時代、利根川水運の

は溶解。パワフルアメリカは倒れても取られても起き上がり食らいつく不屈の闘志に疲れ果て最後はGK海堀の空中シヨで星条旗は力なく落下。日本に有って世界に無いものそれは夢に向かつていく姿勢、試練に耐える力、何よりも先輩が築いた技術を蓄積してそれをチーム力に代える力だろ。物・心ともに応援してくれた人に感謝の気持ち忘れなないでしこへ、神がくれた贈り物。しばしは酔いしれよう。

ふと女房を見る。日本女性
は強くなつたなあ。(白石義孝)

発達により、物資の一大集散地となつた佐原は、米穀・薪炭・酒・醤油などを江戸へ運び、江戸からは呉服や珍しい品々を満載した船が頻繁に入りするなど大いに賑わつた。当時の里謡に「お江戸見たりや佐原にござれ、佐原本町江戸まさり」と詠み唄われ、人口に膾炙かいしやした」と。

どうも「佐倉新町江戸勝り」の由縁は、商人町佐原を唄つた俗謡が城下町佐倉に伝誦したものと考えるのが自然である。

(田村孝則)